

演劇を用いた地域に開かれた カフェ型健康教室の開発と評価 ～多職種連携による糖尿病劇場の経験を踏まえて～

岡崎 研太郎 ●九州大学 大学院医学研究院 地域医療教育ユニット 助教



グループ毎にテーマに関するお題(ジレンマ)を決める様子

要旨

糖尿病と認知症をテーマに、演劇を用いたカフェ型健康教室(以下「演劇健康カフェ」)を地域の保険薬局とコミュニティセンターで実施した。プロの俳優の導入劇やYes/Noカードの活用、グループでのディスカッションなどを通じて、参加者が無理なく演劇形式による発表を実施できた。参加者への質問票調査から、演劇健康カフェの前後でテーマに関する知識や自信の上昇と、演劇健康カフェへの高い満足度が示された。

参加者へのインタビュー調査では、演劇健康カフェの長所として、演劇の効用、Yes/Noカードの効果、多世代参加の影響、などが明らかになった。多職種連携による地域住民を対象としたヘルスプロモーションの一手法として、演劇健康カフェの有用性が確認できたと考える。今後は、プロの俳優の関与がなくても、医療者が地域のカフェや公民館で、あるいは薬剤師が保険薬局で、同様の演劇健康カフェを開催できるようなトレーニングプログラムを開発し、この取り組みを全国に普及させていきたいと考えている。

1. 背景と目的

近年、認知症カフェなど、医療や健康をテーマとしたカフェ型の医療者/非医療者間コミュニケーションが盛んである。医療者と非医療者が対等の立場で、相互に尊重し、率直な意見交換ができる対話の場を求める時流が背景にある。我々は「糖尿病劇場」など多職種の医療者が演じる劇を取り入れたワークショップを、医療系学会や患者会等で実施してきた。

しかし、健康カフェを多職種協働でどう開催するか、プログラム作成や実践に関するノウハウはあまり公開・共有されておらず、健康カフェの効果報告例も少ない。演劇を活用した地域住民対象の健康教育報告も少なく、効果に関するデータはほとんどない。

目的は、演劇を用いた地域に開かれたカフェ型健康教室(以下、「演劇健康カフェ」)を開発・実施し、その効果を検討すること。

2. 活動の方法

演劇健康カフェについて

冒頭でテーマに基づく短い劇をプロの俳優が実演し、上演後に提示された「お題」(テーマに関するジレンマ)に、参加者はYes/Noカードを用いて回答した(第1回「微妙な距離感の相手に飲み会に誘われた。糖尿病だと伝える? Yes or No」、第2回「仲の良いご近所さんが認知症になっているかも。ご家族に伝える? Yes or No」)。続いて参加者はグループワークを行い、最後にはグループ毎にお題を一つ選び、2分程度の劇を創作、上演した(表1)。

研究デザイン

参加者への質問紙調査とインタビューによる混合研究法を用いた。

量的データの収集

成人参加者には、参加前に伝達的・批判的ヘルスリテラシー尺度 (CCHL) へ、前後でテーマに関するオリジナルの質問票 (5段階 Likert スケール) へ回答を依頼した。

質的データの収集

参加者の一部に、後日、参加動機、感想、テーマに関する認識の変化、等についてオンラインインタビューを実施した。逐語録を作成し、テーマ分析の手法で質的に検討した。

3.現状の成果・考察

演劇健康カフェの実施

2022年10月1日に大阪府箕面市のスギ薬局箕面東店で糖尿病をテーマに第1回を、第2回は10月16日に佐賀県基山町の基山フューチャーセンターラボで認知症をテーマに開催した。

参加者の背景

参加者は第1回13名、第2回21名であった (表2)。

ヘルスリテラシーについて

参加者の平均CCHL点数 (5点満点) は、第1回が3.51点、第2回は3.91点であった。

演劇健康カフェの効果：知識・自信・満足度

参加前後で、参加者のテーマに関する知識と自信は上昇した。また満足度 (5点満点) の平均値は、第1回4.31点、第2回4.63点であった。

演劇健康カフェの効果：インタビューから

オンラインインタビューを参加者9名 (うち男性3名) に実施した。分析の結果、演劇健康カフェの長所として、テーマに関する気づき、演劇の効用、Yes/Noカードの効果、多世代参加の影響等が判明した。

表1 演劇健康カフェのタイムスケジュール

13:30~	参加者集合
13:45~	事前アンケートに回答
14:00~	演劇健康カフェ
5分	1.はじめに：あいさつ、自己紹介
10分	2.導入劇：俳優による短い劇を鑑賞した後、出されたお題にYes/Noカードを用いて回答
15分	3.グループ毎に、テーマに関する経験話し合い、各人がお題を提案
5分	4.グループ毎にお題を決定
20分	5.グループ毎に劇の制作
30分	6.グループごとに劇の発表をし、参加者やスタッフからコメント
5分	7.質疑応答とまとめ
15:30~	事後アンケートに回答後、解散

表2 演劇健康カフェ参加者の背景 (第1回、第2回を合わせて)

参加者 (人)		34
年代 (人)	小学生	2
	20代	3
	30代	0
	40代	11
	50代	9
性別 (人)	60代	5
	70代	4
	男性	11
	女性	23
医療職 (人)	薬剤師	7
	栄養士	2
	看護師	1
家族や友人に糖尿病 (2回目は認知症) の人がいる (人)		15
糖尿病 (2回目は認知症) のことで困った経験がある (人)		17

オンラインシンポジウム

2023年2月26日に京都大学杉浦ホールにてシンポジウムを開催し、会場21名、配信57名の参加を得た。

Webサイトの公開

本研究プロジェクトのWebサイトを開設した (<https://www.accd-c.org/sugiura2022/>)。

4.今後の展望

糖尿病と認知症をテーマに、演劇健康カフェを地域の保険薬局とコミュニティセンターで実施した。プロの俳優の導入劇やYes/Noカードの活用、グループでの対話を通じて、参加者は無理なく演劇創作と発表を行い、テーマに関する知識や自信を深め、考えが変化しており、満足度が高かった。多職種連携による地域住民へのヘルスプロモーションの手法としての演劇健康カフェの有用性が確認できたと考える。

今後は、プロの俳優の関与がなくても、医療者が地域のカフェや公民館で、あるいは薬剤師が保険薬局で、同様の演劇健康カフェを開催できるようなトレーニングプログラムを開発し、全国への展開を考えている。



テーマに関するお題に、Yes/Noカードを掲げて答える参加者